
日本図書館文化史研究会
ニューズレター

第 82 号 2002 年 10 月 19 日

日本図書館文化史研究会

〒101-8301 千代田区神田駿河台 1-1
明治大学司書・司書教諭課程
郵便振替口座 00170-5-164973

(事務局)

小黒浩司

ファックス

電子メール

■ ■ 目 次 ■ ■

20 周年記念研究集会・総会、盛会裏に終了	2
2002 年度第 2 回研究例会のご案内	3
大学史研究会第 25 回研究セミナープログラム	4
『図書館文化史研究』第 20 号原稿募集のお知らせ	5
『ニューズレター』原稿募集のお知らせ	5
20 周年記念研究集会個人発表要旨	6
日本図書館文化史研究会 2002 年度予算	11
日本図書館文化史研究会 20 周年記念事業予算	12
『図書館文化史研究』投稿規定・執筆要領	13
新刊紹介 『アメリカ図書館史に女性を書きこむ』	15
< 消息 >	16
研究例会発表募集のお知らせ	16
運営委員会通信	17
事務局だより	18
速報!! 学術研究団体に登録されました	18
予稿集を頒布します	18
会費納入のお願い	18

20周年記念研究集会・総会、盛会裏に終了

2002年度日本図書館文化史研究会研究集会・総会は、本研究会20周年記念事業のひとつとして、去る9月15・16の両日、アルカディア市ヶ谷および法政大学大学院棟を会場に開催されました。研究集会・総会には北は北海道、南は四国・沖縄の全国各地から48名（うち非会員2名）の参加者が集いました。また、記念パーティの参加者は36名でした。

第1日目は、アルカディア市ヶ谷5階大雪の間を会場に、「図書館文化史研究の回顧と展望」をテーマに、午後1時から20周年記念シンポジウムが行われました。阪田代表の開会挨拶に続き、20周年を期に名誉会員に推戴された石井敦氏、岩猿敏生氏、藤野幸雄氏を報告者にお迎えし、山口源治郎、山本順一の両氏を進行役に、予定の時間を超過して、熱のこもった討論が展開されました（このシンポジウムの模様は、機関誌『図書館文化史研究』第20号に掲載予定です）。

シンポジウム終了後、会場を赤城の間に移し、石井敬三氏を司会に、記念パーティが挙行されました。阪田代表の開宴の辞に次いで、宇治郷毅氏の発声により乾杯が行われ、研究会20周年を祝うパーティが始まりました。途中、名誉会員となられた三氏に記念品が贈呈され、また多くの参加者の皆さまからご挨拶をいただき、和やかなパーティとなり、最後は寺田光孝氏の閉宴の辞によって、つつがなく終了しました。

第2日目は、会場を法政大学大学院棟402教室に移し、午前10時から4件の個人発表が行われました（個人発表の要旨は、6～10ページをご覧ください）。司会は午前の部を奥泉和久氏が、午後の部を小川徹氏が担当しました。

個人発表に引き続き、午後3時から会員総会が開催されました。寺田光孝氏を議長に選出し、まず石井敬三前事務局担当から、2001年度の活動報告と会計報告がなされ、拍手をもって承認されました。次に2002年度予算(案)と20周年記念事業予算(案)が、現事務局から説明・提案され、了承されました（総会において承認された上記2予算(案)は、ニューズレター前号に掲載されたものと、内容が一部異なりますので、11～12ページに改めて掲載しました）。

次に「『図書館文化史研究』投稿規定・執筆要領」の見直しを、事務局から提起され、原案を一部修正して、可決されました。13～14ページに「『図書館文化史研究』投稿規定・執筆要領」の改定版を掲載しました。次号（20号）から、適用となりますので、ご注意ください。

なお、『図書館文化史研究』第19号（20周年記念号）も、研究集会直前に発行され、会員の皆さまに既に発送しました。未着の方は、恐れ入りますが、事務局までご連絡ください。

終わりにになりましたが、20周年記念事業の実施にあたり、多くの皆さまにご助力を賜りましたことを、厚くお礼申し上げます。（事務局 小黒記）

2002 年度第 2 回研究例会のご案内

2002 年度第 2 回研究例会を、下記のように開催します。

今回の研究例会は、大学史研究会主催「大学史研究セミナー」に協賛して行います。このため参加申込方法などが従来の研究例会と異なりますので、ご注意ください。

記

- 日 時 11 月 16 日(土)・17 日(日)
- 場 所 明治大学 駿河台校舎 研究棟 4 階 第 1 会議室
- 参加費 1,000 円
- 申込方法 参加ご希望の方は、本研究会事務局へ、葉書、ファックス、または電子メールでお申し込みください。
- 申込締切 10 月 31 日 (必着) でお申し込みします。
- 内 容 本会会員の発表のみ掲げました。4～5 ページに「大学史研究セミナー」の全体プログラムを掲載しました。

【発表 1】 17 日 9 時 30 分～10 時 30 分

三浦 太郎 (東京大学大学院)

- 発表題名

戦後占領期日本におけるライブラリースクール設立の経緯

- 発表要旨

戦前、日本では図書館学を講ずるための制度化はほとんど行われていなかった。戦後占領期に入り、昭和 23 年(1948)にダウズ来日を契機として東京大学に図書館学の研究機関を置く計画が進められたが、立ち消えに終わった。昭和 25 年(1950)、GHQ は ALA と共同でライブラリースクールを設置するプログラムに着手し、初代校長ギトラーは設置校に慶応義塾大学を選んだ。本発表では ALA 文書など 1 次資料に基づきながら、その経緯をたどる。

【発表 2】 17 日 10 時 30 分～11 時 30 分

小黒 浩司 (作新学院大学)

- 発表題名

岡松参太郎の図書館経営：京都帝大附属図書館・満鉄図書館

- 発表要旨

1897 年に創設された京都帝国大学法科大学は、東京帝国大学とは異質の教育体

制を組むことで、先発の東京帝大に対抗しようとした。京都帝大はドイツの大学をモデルに、ゼミナールや卒論を重視し、学生の自主的な学習・研究を尊重し、そうした学生の活動を支援する図書館の充実をはかった。京都帝大教授岡松参太郎は、法科大学図書分館図書主任となり、欧文図書目録の編纂を監修するなど、図書館充実の中心となったと見られる。しかし京都帝大の教育改革の試みは挫折し、学生の図書館利用も激減する。

その後岡松は、1907年南満州鉄道株式会社（満鉄）の重役（理事）に就任、調査部を担当し、満鉄の調査事業の基礎を築いた。彼は満鉄においてもドイツ人学者を招聘するなど、ドイツの研究システムの導入を試みた。彼はその図書室の立ち上げに積極的に関わり、みずから図書の整理にあたったといわれる。この図書室が後の大連図書館となった。

大学史研究会第25回研究セミナープログラム

第1日目 11月16日（土）

受付 13:00～

シンポジウム 14:00～18:00

「横尾壮英大学史学の学問的検証」

司 会：松浦正博（広島女学院大学）

趣旨説明： 別府昭郎（明治大学）

報 告： 中山 茂（神奈川大学名誉教授）

皆川卓三（元神奈川県立衛生短期大学学長）

潮木守一（武蔵野女子大学）

全体討議（途中にショート・ブレイクをはさみます）

第2日目 11月17日（日）

特別企画 9:30～11:30

「大学と図書館」

司 会：阪田蓉子（明治大学）

三浦 太郎（東京大学大学院）

「戦後占領期日本におけるライブラリースクール設立の経緯」

小黒 浩司（作新学院大学）

「岡松参太郎の図書館経営：京都帝大附属図書館・満鉄図書館」

昼食 11:30～13:00

総会 13:00～13:30

自由研究 13:30～16:30 (途中にショートブレイクをはさみます)

司 会：進藤修一 (大阪外国語大学)

爲政 雅代 (同志社大学非常勤講師)

「ドイツ政治大学と政治—20世紀ドイツ社会における政治教育の実践」

早島瑛 (関西学院大学)

「信仰と高等商業教育」

別府昭郎 (明治大学)

「フンボルトの大学教育論」

会場ご案内

明治大学駿河台校舎 (<http://www.meiji.ac.jp/campus/suruga.html>)

JR 中央線御茶ノ水駅御茶ノ水口より徒歩 3 分

千代田線新御茶ノ水駅 B1 出口より徒歩 6 分

都営新宿線小川町駅・線新御茶ノ水駅 B5 出口より徒歩 5 分

都営新宿線・都営三田線・半蔵門線神保町駅 A5 出口より徒歩 8 分

『図書館文化史研究』第 20 号原稿募集のお知らせ

機関誌『図書館文化史研究』第 20 号の原稿を募集します。このたび改定された投稿規定・執筆要領を、13～14 ページに掲載しました。

原稿の締切は 2002 年 12 月末日です。ふるってご投稿ください。

なお、この件に関するお問い合わせ、ならびに原稿の送付先は別記事務局までお願いいたします。

『ニューズレター』原稿募集のお知らせ

ニューズレターの原稿を常時受け付けています。

次号 (83 号) 掲載を希望される場合、12 月末日までに別記事務局まで原稿をご送付ください。

今後ニューズレターで、図書館文化史研究に関わる文献・情報を速報していきたいと思っております。会員・非会員の問わず、関連業績を事務局までご連絡ください。皆様のご協力をお願いします。

20周年記念研究集会個人発表要旨

【発表 1】

鈴木 守 (図書館情報大学大学院)

- 発表題名

ローゼンワルド・カウンティ・ライブラリーの学校図書館サービス—アメリカ南部における公共図書館と学校との協力の試み—

- 発表要旨

本発表では、ジュリアス・ローゼンワルド基金(Julius Rosenwald Fund)によって、1929年からアメリカ南部の10のカウンティおよび1教区において実施されたカウンティ・ライブラリー・デモンストレーション・プログラムについて、とりわけ公共図書館と学校との協力の観点から検討を加えた。

当時のアメリカ南部では、1927年に南部カレッジ・セカンダリースクール協会(Southern Association of Colleges and Secondary Schools)が承認した『ハイスクールのための学校図書館基準』にもとづき、学校図書館の振興が推進されようとしていた。しかし、財政事情の厳しい農村部の小規模校の存在や、大恐慌による経済情勢の悪化によって、学校図書館単体の整備は困難で、公共図書館と学校との協力による学校図書館サービスの向上が期待された。カウンティ・ライブラリー・デモンストレーション・プログラムにおいては、カウンティにおける公共図書館と学校との協力を試みることを主要な目的としていた。同プログラムが実施されたカウンティの中で、テネシー州のHamilton カウンティ及びKnox カウンティにおいては、公共図書館と学校や教育委員会とのあいだで契約を結び、それぞれが明確な役割分担を行ったうえで、公共図書館と学校と協力して展開されるカウンティ全体の学校に対して提供される図書館サービスが評価された。

カウンティ・ライブラリー・デモンストレーション・プログラムは、実施されたカウンティや教区が、人口面や財政面から必ずしも南部の典型的なカウンティではなかったため、南部のカウンティにおけるデモンストレーションとしての適切さには疑問が投げかけられたものの、カウンティ・ライブラリーと学校との協力による経済的かつ効率的な学校図書館サービスが実証された。1934年に南部カレッジ・セカンダリースクール協会が『ハイスクール学校図書館サービス整備のための公共図書館による全面的または部分的に提供される代替的サービス』(Equivalent for High-School Library Service Supplied Wholly or In Part by the Public Library)を採択し、公共図書館と学校との協力による学校図書館サービスの有効性が認められるとともに、個々の学校が図書を図書館資料そのものを所有するよりも、公共図書館との協力を通じ、図書館資料を利用することができることへの重点の移行がみられる。この点において、学校図書館サービスの実質的拡充という方向で、ローゼンワルド・カウンティ・ライブラリー・デモンストレーションが果たした役割は大きい。

【発表 2】

深井 耀子（椋山女学園大学）

● 発表題名

トロント市立図書館の児童サービス—少年少女の家開設（1922 年）からの 10 年・リリアン・スミス児童部部長の年報記録から—

● 発表要旨

申し込み当時のわたしの発表題名は、「リリアン・スミスの児童図書館論—トロント市立図書館年報・少年少女部部長報告の記述から」であった。しかしながら実際の発表の内容は、上記のとおりである。

リリアン・スミスは、19 世紀の終わりに生まれ 1983 年まで生きた伝説的存在であり、少年・少女部部長としても 40 年のキャリアがある。せめて部長としての記録に限定すれば、「児童図書館論」のほんの一部でもわかるのではないかと考えたのであるが、とうていまとめることは無理であった。記録だけでも膨大であるので 1920 年代、不況と戦争の時代、そして 1950 年代の時期区分にわけて研究するほかないことが判明したからである。

1920 年代は、戦後復興予算のもとで、「家」をはじめ分館網やセツルメントハウス内分室を確立した時期であり、それは館長のリーダーシップによると考えられる。リリアン・スミスとしての業績は、児童図書館員の養成に全力を投入したことであろう。児童図書館員協会をたちあげて、図書館費の少ない 1930 年代にむけての下地をつくった。部長報告という限定された場に表現されたリリアン・スミスの 20 年代の状況をあきらかにすべく努力したつもりである。

【発表 3】

篠原 由美子（図書館情報大学大学院）

● 発表題名

小牧共立普通図書館（長野県上田市）設立の事情とその実態

● 発表要旨

はじめに

小牧共立普通図書館は、明治時代末に長野県上田市小牧地区に設立された小規模図書館である。

小牧地区は、もとは小牧村だったが、1889（明治 22）年近隣の諏訪形村、御所村、中之条村と合併して城下村となり、1921（大正 10）年上田市となった。1889（明治 22）年、城下村となる直前の小牧村の人口は 132 戸 559 人であった。他の上小地域（上田市と近隣の小県郡をあわせた地域）と同様、養蚕が盛んで、最盛期には蚕種を扱う農家が 11 戸あった。

1. 図書館設立の事情

1907（明治 40）年 3 月、日露戦争に従軍した小牧出身の軍人 3 人が賜金の一部

を区に図書館設立のために寄付した。これが小牧区に図書館が設立される端緒である。1908年(明治41)1月20日、区の総会で図書館設置に関し、委員長手塚國太郎、会計係片岡条太郎が選ばれた。また、夜学会と関係が深いということから、夜学会からも代表2名が選ばれた。同年3月、図書委員会は、「小牧区公立普通図書館」と館称をさだめ、館則を作った。

1912(明治45)年、青年会は区に対して図書館の管理権を譲るよう交渉した。図書館不振にかんがみ、その発展を期すためだった。これにより、青年会と夜学会が図書館の管理権を得た。1916(大正5)年、区は所有権も青年会に譲り、同時に図書館を公施設とするとの提案をした。同年8月、公設の認可を得た。

小牧出身の軍人が図書館の設立を図った理由は2つあった。一つは、日露戦争の勝因は普通教育にあったという信念から、図書館に普通教育を補完する役割を期待し、「国力の充実」、「郷党の発展」を願ったこと。いまひとつは、彼らが出征中に区民から受けた種々の援助に対して感謝の念を表すことだった。

従軍軍人8人は、小牧から出征した軍人の全員だった。1907年3月時の年齢は、23歳から34歳で、賜金には差があった。学歴は、片岡条太郎が中等教育学校卒だが、ほかの人物についてははっきりしない。

図書館運営に加わった夜学会の実態がどのようなものであったか、不明の点が多い。ただし、10月から3月までの農閑期に連夜行われていたこと、尋常科卒業者を対象とした補習教育の性格をもっていたのではないかと考えられること、青年会が資金補助をしていたこと、1915(大正4)年廃止されたことは明らかになった。

2. 設立初期の運営と利用状況

従軍軍人の片岡条太郎らは、区に図書館を寄付する際、「普通図書館準則」を作った。その準則と、1年後に図書委員(片岡条太郎も一員)が協議作成した館則を比べると、図書館の利用を無料としている点は同じだが、「準則」が学校教育の参考書の収集を想定していたのに対して、「館則」は幅広い種類の資料の収集を謳っており、通俗図書館の性格を強く持ったものになっている。

実際の蔵書構成も、農業・蚕業関係の専門書以外は難解なものが少なく、読物が多い。

図書館の開館日は、農閑期の10月から3月末までの「1」と「6」の日だった。しかし、この日以外にも、夜学が行われた日は貸出しが行われている。女性、子どもの貸出し記録はないが、実際には女性、子どもたちにも利用された。

分類は、9分類で、以下のようになっている。

イ号 農商／ロ号 地理・歴史／ハ号 理科／ニ号 数学・文学／ホ号 法制経済／ヘ号 生理衛生／ト号 (見だしがこすれて読みとれないが、内容は読物類である)／チ号 雑書／(記号なし) 辞書。

この分類方法は、小牧図書館特有のものらしい。ただし、現存する蔵書のラベルにはこの分類記号ではなく、数字が記入されている。

まとめ

小牧に住む人々は、いまでも自分たちの地区には図書館があったことを誇りにして

いる。小牧図書館は、もともと小牧地区住民のために設立された。また、無料で利用できたこと、多くの人が利用できる蔵書になっていたことが、地域に根付いた図書館施設になり得た大きな理由であるように思われる。

今回の調査を通して、戦前の一小規模図書館の実態と背景の一端を知ることができた。また、夜学と図書館、夜学と図書の関係は、今後の課題として興味深い。

【発表 4】

田澤 恭二

- 発表題名

図書館施設としての和室

- 発表要旨

1 はじめに

日本の図書館の建物は、明治以来原則として西洋式建築であり、床は基本的に硬い材質で作られていて、全体が土足で入ることを前提としている。そしてこれらの西洋式建築の部屋を、日本では洋間（洋室）と呼んでいる。しかし、昔から一部の図書館では、部分的に履き物を脱いで入る日本式建築の部屋、つまり和室（畳室）が設置されている。この図書館の和室には、事務系和室と閲覧系和室の 2 種類がある。この内、前者は、戦前から官庁・会社・学校などで一般的に見られた用務員室・宿直室などと、戦後 1960 年代以降に設置された和風の職員休憩室・集会室などとの 2 系統に分類できる。一方、後者は、図書館独特のもので、利用者の要求に応じて、1980 年頃から設置されるようになった。

なお、明治期に設置された図書館で、日本式建築をそのまま使用し、閲覧室も事務室も畳室である例が見られるが、これはやむをえず和室のまま転用したものであり、意図的・計画的に和室を使用したわけではないので、ここでは言及しない。

2 和室（畳室）の発生

① 洋室と和室

日本で和室という概念が発生したのは、明治期に西洋式建築が導入され、土足で入る部屋、つまり洋室が移入されてからである。当時洋室は、文明開化の一つの象徴であった。そしてこの洋室が官庁・会社・学校・軍隊などで普及するにつれて、日本で 14 世紀頃に完成した土足禁止の畳室は、新式の洋室に対して旧式な部屋というイメージを伴う和室と名付けられ、洋室と和室という対立概念も発生した。

② 表と奥（パブリックとプライベート）

洋室と和室という対立概念が成立すると共に、前者がパブリックな空間で、後者がプライベートな空間であるという意識も発生した。そして、洋室が公務・仕事・勉強・活動の場所であり、和室が休息・就眠・団欒・安らぎ・憩いの場所であるという機能分担が出現した。この機能分担は、住居についての日本古来の「表と奥」という考え方と深く結び付いている。パブリックな空間を「表」とし、プライベート

トな空間を「裏」とするものである。この区分は、武家の住居以外の、町人などの住居でも、「店の間」と「住まい」として存在していた。明治以降、この「表」や「店の間」がまず洋風化され、「裏」や「住まい」はかなり遅れて洋風化された。

3 西洋式建築の歴史

省略。

4 図書館の和室

図書館の和室には、事務系和室と閲覧系和室の2種類がある。

① 事務系和室

(1) 用務員室・宿直室など

これは、戦前から多くの大型公共図書館や大学図書館に広く設置されていた。用務員や宿直・当直者の生活空間としての和室である。これらの和室は、24時間の生活が可能で、図書館プロパーのものではない。用務員や宿直・当直者の生活感覚と密接に結び付いた、和風の施設や設備が整えられ、そこで職員が生活した事例も多い。これらは次の(2)の源として注目すべきであろう。

(2) 職員休憩室・集会室など

これは、戦後1960年代から建設された大型の図書館に見られる、職員の休息・団欒・憩いのための和室である。名称は職員休憩室・集会室・会議室・研修室などとなっているが、24時間の生活を目的とした施設・設備は持たないのが普通である。履き物を脱ぎ、足を伸ばして休息したいという、日本人特有の生活様式を、職員の人権の一つとしてとらえた発想とも言える。

② 閲覧系和室

これは1980年頃から、主として公共図書館で館内閲覧者のために設置した和室である。机と椅子ではなくつろいで読書や調査ができないとか、寝そべて本を読みたいといった利用者の読書習慣に基づいた要求を具体化したものである。しかし、こうした和室については、さまざまな問題点があり、公共図書館界では賛否両論があるとされている。一方、児童に寝転がって絵本などを読ませるために、部分的に畳や絨毯やマットなどを敷いている図書館もある。これも和室と同じ機能を持つ空間であるが、これに対しても反対意見があるとされている。

5 結語

和室が本来的に日本人にとって安らぎや憩いの場所としての機能を持っており、そうした機能を図書館に求める職員や利用者が存在する以上、図書館は和室を持つべきである。そうした職員や利用者の生活習慣や読書習慣に基づく要求を、図書館管理者側の経営的立場から拒否することは許されるべきではない。西洋式の生活習慣や読書習慣だけを理想のものとする考え方は捨てるべきである。それぞれの習慣は一個人の基本的な人権に結び付くものであり、公権力で左右するべきものではない。現代は、これまでの生産者・管理者中心から消費者・利用者中心の社会へ移行する時代であるからである。図書館もその例外では有り得ない。

日本図書館文化史研究会 2002 年度予算

[一般会計]

収入の部

会費	390,000.	2002 年度分 (3,000 円×130 人)
雑費	200.	
前年度繰越金	224,103.	
<u>総 計</u>	<u>614,303.</u>	

支出の部

事務局費	75,000.	
会議費	5,000.	
消耗品費	15,000.	
通信費	10,000.	
口座払込負担金	10,000.	
交通費	10,000.	
事務局移転費	40,000.	
ニューズレター	140,000.	
編集発行費	80,000.	年 4 回
送料	60,000.	
機関誌刊行費	100,000.	『図書館文化史研究』 No.19
発行費用	50,000.	
抜刷費用	50,000.	

※ 不足部分は 20 周年特別会計から拠出する → 30 万円

研究会運営費	20,000.	
研究例会	10,000.	関東及び関西で年 3 回 + α
運営委員会	10,000.	年 4 回程度

※ 研究集会費用は 20 周年特別会計から拠出する → 20 万円

積立金 (特別会計)	150,000.
予備費	129,303.
<u>総 計</u>	<u>614,303.</u>

[特別会計：25 周年記念事業積立金 (2002-)]

20 周年記念事業積立金の剰余金	100,000.
2002 年度	150,000.
<u>総 計</u>	<u>250,000.</u>

日本図書館文化史研究会 20 周年記念事業予算

1. 『図書館文化史研究』 19 号・20 周年記念号(2002 年 9 月刊行予定)の刊行

- 本文約 200 ページ (通常号比約 100 ページ増)
- 販売価格は 2,600 円程度か
- 刊行費用は 40 万円程度か
- 増頁による価格増部分は積立金から拠出する
 - 02 年度通常会計から 10 万円
 - 20 周年特別会計から 30 万円

2. 20 周年記念研究集会の実施

- 支出見込 275,000 円
 - 予稿集印刷費 62,000
 - 会場使用料 42,000
 - シンポ諸費用 86,000
 - 会場看板費用 10,000
 - テープ起こし 50,000
 - 事務局諸費用 25,000
- 収入見込 75,000 円
 - 参加費 75,000(参加者 60 名程度)

※ 特別会計から支出 250,000

3. 20 周年記念パーティの実施

- 支出見込 260,000 円
 - パーティ代金 245,000
 - 会場飾り花 15,000
- 収入見込 160,000 円
 - 参加費 160,000(参加者 32 名程度)

※ 特別会計から支出 100,000 円

◎ 特別会計からの支出合計 60 万円

※ 20 周年記念事業積立金 70 万円 (2002 年 3 月末現在)

『図書館文化史研究』投稿規定・執筆要領

応募資格等

- 1 日本図書館文化史研究会会員は投稿することができる。
- 2 応募原稿は未発表のものに限る。ただし口頭で発表し、これを論文にまとめたものは除く。

応募原稿等

- 3 原稿は完全原稿とする。ワープロ等を使用する場合、A4用紙（縦位置）、1行40字×40行・横書きの書式に設定する。手書きの場合は400字詰（20字×20行）原稿用紙を用いる。
- 4 枚数制限は特に設けないが、長文の場合2回以上の分載とすることがある。
- 5 図版は占有面積1ページ分を400字詰原稿用紙3枚の割合で換算し、そのまま版下として使用できるよう鮮明なものを提出する。
- 6 原稿はMS-DOS標準テキストによるワープロ原稿が望ましい。
- 7 原稿には標題（外国語併記）、著者名（ローマ字併記）、および著者の所属機関名を記入した表紙を付ける。

原稿の提出

- 8 原稿はコピーを含め2部を提出する。なお、投稿原稿は返却しない。
- 9 原稿は書留により別記編集委員会に郵送する。ワープロ原稿の場合、掲載が決定次第、使用機器、ソフト名を明記した3.5インチのフロッピー・ディスクをあわせて提出する。
- 10 原稿の締切は、毎年12月末日（必着）とする。

編集委員会

- 11 原稿の採否は編集委員会が決定する。
- 12 編集委員会は原稿の内容・表現等について、著者に修正・書き直しを求めることがある。また、編集委員会で用字・用語等について、修正・統一をすることがある。

校正・抜刷

- 13 著者校正は初校のみとする。その際、字句の修正以外は原則として認めない。
- 14 著者には抜刷20部を進呈する。

体裁・表記

- 15 原稿の執筆は以下の要領による。
 1. 本文の見出し区分は、原則としてポイントシステムを使用する。

2. 句読点は「,」「。」を用い、各1字分をとる。その他の記号類も各1字分をとるが、点線(……)・ダッシュ(—)は各2字分をとる。
3. 数字は引用文、および漢語の一部となっている場合を除きアラビア数字を用い、2桁以上の場合は1マス2字をあてる。
4. 外国語は慣用的呼称をカタカナで表記し、必要に応じて原綴を()に記す。欧文文字の大文字は、1マス1字、小文字は1マス2字をあてる。
5. 西暦年以外の紀年を使用するときは、必要に応じて西暦年を()に入れて併記する。
6. 本文中の引用文献のタイトルは、欧語の場合はその下にアンダーラインを引き、それ以外は『 』に入れる。
7. 本文中の論文等のタイトルは、欧文の場合は“ ”に入れ、それ以外は「 」に入れる。
8. 本文中の引用は、「 」、または“ ”に入れる。長文の場合は行を改め、本文より2字下げて記す。
9. 注は通し番号を付け、全文の末尾にまとめる。その際文献の記載については原則として以下のように記載する。

[雑誌論文からの引用]

渡辺重夫「国民の権利としての図書館利用」『図書館学会年報』Vol.30, No.2, 1984.6, p. 55.

Harris, Michael H. "The dialectic of defeat : antimonies in research in library and information science," Library Trends. Vol.34, No.3, 1986, p.515-531.

[図書からの引用]

永末十四雄『日本公共図書館の形成』日本図書館協会, 1984, 352p.

Newhouse, Joseph P. and Arthur J. Alexander. An Economic Analysis of Public Library Services. Lexington, D.C. Heath Co., 1972, p. 120.

[インターネット上の情報]

石村恵子「電子図書館と著作権」『つくばね』[オンライン] Vol. 23, No. 4, 1998.4

[引用 1998-9-7]

<URL:http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/pub/tsukubane/2304/ishinura.html>
International Council on Archives. ISAD(G) : General International Standard Archival Description [online]. Ottawa, ICA, 1994[cited 1997-9-2]
<URL:http://www.archives.ca/ica/isad.html>

原稿の送付先

小黒 浩司

新刊紹介 『アメリカ図書館史に女性を書きこむ』スザンヌ・ヒルデンブランド
 編著 田口瑛子訳 京都大学図書館情報学研究会発行 日本図書館協会発売
 2002年7月 366p ISBN4-8204-0203-x ¥6,000

深井耀子（梶山女学園大学）

本書は Suzanne Hildenbrand, *Reclaiming the American Library Past: Writing the Women In* (Ablex Publishing, 1996) の全訳で、12名の著者によるアメリカ図書館女性史のアンソロジーである。アメリカ図書館史上で貢献のあった有名・無名の女性たちに焦点を当てた第Ⅰ部は、ジーン・ブラックウェル・ハトソン、アイダ・アンジャリー・キダー、アデレード・ハッセ、ジュリア・ブラウン・アスブランド、ファニー・エリザベス・ラチフォード、ドロシー・ポーター・ウェズレー、アン・キャロル・ムーアなどのパイオニア的な生涯を彼女たちの仕事とともに紹介している。彼女たちの多くが無名か無名に近かったということがアメリカ図書館史の欠落を物語っている。第Ⅱ部は図書館専門職の様々な問題——低賃金、知的自由、専門職教育、ボランティア——をジェンダーという観点から分析している。たんに専門職の問題として捉えられていたことに、ジェンダーという視点を与えると、別の見え方がするのである。従来の研究の問題点（性を重要な変数と見なしてこなかった）を明らかにしている。「訳者あとがき」にもあるように、全ての論文の質がそろったものではなく、修士論文程度のもものも含まれているが、研究の少ない分野なので了とせずばなるまい。

図書館史に初めて女性を多数登場させたことでも知られているディー・ギャリソンの『文化の使徒』（田口瑛子訳 日本図書館研究会 1996）が、本書のなかでしばしば批判的に言及されているが、比較対照して読むことも有意義であろう。

訳者の田口瑛子氏は、IFLA 女性図書館員ラウンドテーブルにおいてニューズレター *Women and Librarianship* 編集を担当するなどに貢献し、その場をきっかけに著者と長年にわたる親交をむすんできた。理論と実践の両面からみて、日本でもっともふさわしい第一人者による訳書である。ぜひご一読をおすすめしたい。

評者は、北米図書館史に関する選択科目を開講しているが、それは20世紀初頭、米国の黒人隔離の時代から、カナダ連邦政府の多文化主義政策までの70年間を扱う。米国の公民権運動の強烈な熱波が、カナダのケベック州のフランス系住民の覚醒をよびおこし、「仏・英」語対等の2言語公用語法が実現する。その土台のうえに連邦政府の2言語多文化主義政策が花開く。以上は私がかつてに描く北米史のデザインであるが、その時期ごとに公共図書館史、とくに女性司書の活躍に焦点をあてる。しかしながらこれまではアン・キャロル・ムーアとリリアン・スミスが中心になってしまうのはつまらなかった。なんとしても黒人の伝記が必要と思っていたところに本書が発刊されたので、さっそく冒頭の「アフリカ系アメリカ人の歴史的連続性——ジーン・ブラックウェル・ハトソンとショーンバーグ黒人文化研究センター」

を講読したところ、学生達に思いのほか好評であった。つまりリリアン・スミスは、いかにもエリートのキャリア組であるが、黒人の奮闘は、地方の女子大に学ぶ彼女たちの立場にもつながり、共感を呼ぶのであろう。「図書館にもローザ・パークスがいたのですね。私たちが就職試験にがんばりたい気持ちになった」と語った学生もいたことは、本書の意義を感じさせる証言であろう。

少し高価に思うかもしれないが、長い目でみて「おとくな」買い物なのである。

司書課程にはなんとといっても女性が多いのだから、彼女たちをはげます内容は不可欠なものと考えるが、みなさんは如何でしょうか。

<消息>

わたしたちの小さな集まりである FLINT（女性と図書館ネットワーク）は 2002 年 8 月をもって閉幕いたしました。大阪で発足し 1984 年以来活動してまいりましたが、中心メンバーの多くが職場の中堅となり、維持が難しくなってきたからです。今後どなたかが図書館史年表を作成なさるときに、ささやかな歩みでしたが、その足跡なりと書きどどめていただければありがたいと思い、ここに記しました。ちなみに、本会代表の阪田蓉子氏も創立時からの会員でした。お問い合わせがありましたら

までどうぞ。通巻 70 号をこえる「FLINT ニュース」も貴重な資料であり、史料になると自負しております。

（深井・田口）

研究例会発表募集のお知らせ

本研究会では、毎年度 3 回（6 月頃、12 月頃、3 月頃）に研究例会を実施しています。研究例会での発表を希望される方は、次の各項を明記して、別記の事務局までお申し込みください。

- 氏名（所属）
- 連絡先（住所、電話、メールアドレス等）
- 発表題目
- 発表要旨（200 字程度）
- 発表時間（通常質疑応答を含め 1 件 1 時間程度）
- 発表希望場所（例：関東、関西）

運営委員会通信

■■ 次回運営委員会のお知らせ ■■

次回運営委員会を、下記のように開催します。本研究会の運営に興味・関心のある方は、是非ともご参加ください。なお、当日ご都合の悪い方は、別記事務局まで郵便、ファックス、または電子メールで、ご意見、ご希望等をお寄せいただければ、運営委員会で検討いたします。

記

- 日 時 11月17日(日) 12時～13時
- 場 所 明治大学 11号館司書・司書教諭課程室
- 内 容
 1. 20周年記念事業決算報告
 2. 2002年度決算中間報告
 3. 研究会規約の改定について
 4. 学術会議登録について
 5. 来年度の事業について
 6. 来年度の研究集会について
 7. 会員動向

ほか

■■ 前回運営委員会の報告 ■■

実施日：2002年9月16日
場 所：法政大学大学院棟

以下のような事項について、協議しました。

1. 20周年記念事業中間報告
2. 次回研究例会について
3. 研究会規約の改定について
4. 来年度の研究集会について
5. 学術会議登録について
6. 来年度事業の検討
7. 『図書館文化史研究』第20号の編集について
8. 会員動向
9. 次回運営委員会について

事務局だより

◎◎ 速報!! 学術研究団体に登録されました ◎◎

本研究会では昨年度末に、第 19 期日本学術会議会員の選出に係る学術研究団体の登録申請を行いました。同会議会員推薦管理会より 9 月 13 日付文書で学術研究団体に登録された旨、通知が届きました。

■■ 予稿集を頒布します ■■

今回の 20 周年記念研究集会・総会では、予稿集を作成しました (A4 版、58p) この予稿集を実費 (500 円) で頒布します。

郵送ご希望の場合、送料 (240 円) を加えた、合計 740 円をそえて (郵券可)、事務局まで申し込んでください。なお、送り先の郵便番号・住所・氏名を忘れずに明記してください。

■■ 研究集会の領収書について ■■

研究集会の参加費の発行を申し込まれて、受け取っていらっしゃらない方は事務局までご連絡ください。

■■ 会費納入のお願い ■■

2002 年度会費をまだ納入されていない方は、至急ご送金ください。年会費は 3,000 円です。

なお、事務局の移転にともない、振替口座を変更しましたので、旧振替用紙は使用しないでください。

■■ 会員動向 ■■

退 会

久保 明生 2001 年 2 月ご逝去。謹んでご冥福をお祈りします。

転居・所属変更